心をつなぐヴァイオリン ―川井郁子―

〔高学年〕

ここは、タイ西部のタムヒン難民キャンプ。野外ステージが設けられ、その周りには、キャンプに暮らす数百人の人々が、演奏を待ちわびています。

ステージの中央で演奏を始めようとしているのは、川井郁子[※注1]。日本を代表するヴァイオリニストです。

郁子は、六歳のとき、ヴァイオリンを習い始めました。ヴァイオリンが好きで、夢中で練習をしました。そして、自分の思いや感情を人々に伝えるために、一途に表現し、演奏を続けてきました。

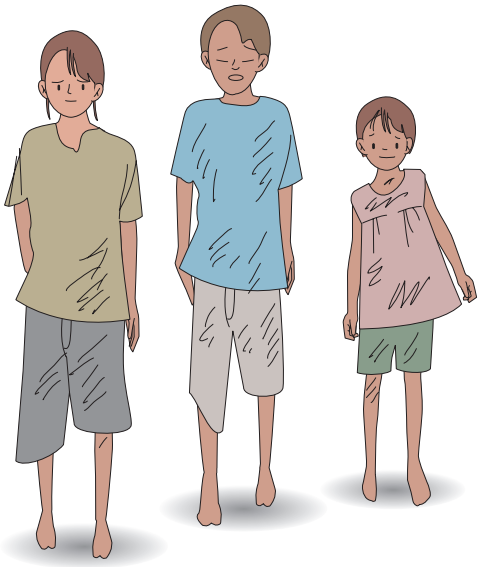
しかし、娘の誕生をきっかけに、郁子の演奏が変わってきました。家族と過ごす日々がかけがえのないものになり、娘のちょっとした仕草もいとおしく、いつも抱きしめておきたいと思うようにもなりました。娘以外の子どもが、公園で転んだのを見ただけでも、かけよって声をかけることもあり、自分の子どものように大切に思えるようになりました。そんな気持ちがヴァイオリンの音色にも表れ、優しい心を込めることができるようになってきたのです。郁子は、楽しく、笑いの絶えない日々を過

ごしていました。

ある日、テレビを見ていると、ドキュメンタリー番組で、タイ西部のタムヒン難民キャンプ※注2で暮らす少数民族カレン族のことが紹介されていました。その映像を見て、郁子は、はっと息をのみました。

電気や水道もない難民キャンプ。着の身着のままで生活をしている子どもたち。何日も何日も体を洗うこともできない。おなかいっぱい食事をすることもできない。何人もの子どもたちが、病気で命を失っているのです。

それでも、一生懸命生きようとしている子どもたち。これからの自分たちの未来を信じ、必死で勉強に取り組んでいる子どもたち。子どもたちの大きな瞳は、テレビを通して、郁子をじっと見つめているようでした。郁子は、胸がぎゅっと苦しくなり、いつの間にか、娘をおもいきり抱きしめていました。



（同じ地球上に生まれながら、ここで暮らす子どもたちには、自由も喜びもないのだろうか。毎日、どんなことを考え生活しているのだろうか。私が、この子たちにできることは何かないのだろうか・・・。）

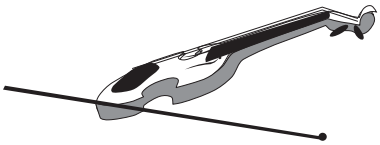
その夜、郁子は、カレン族の子どもたちのまっすぐな瞳を思い出し、一睡もできませんでした。

何か自分ができることはないかと、友達にも相談しました。

「あなたにしかできないことがあるんじゃないの。」

郁子は一晩考えました。そして、ヴァイオリンを通して活動することを、決心するのでした。

郁子は、難民の子どもたちへの援助を目的としたチャリティーコンサートを開催したり、「川井郁子　マザー　ハンド基金」も設立したりしました。いろいろな活動をするうちに、実際にタムヒン難民キャンプに行って、子どもたちの力になりたいと考えるようになりました。まだ、一歳の我が子を日本に残し、不安定な国に行くことを、周囲の人々に反対されました。十分な活動をしているので、そこまですることはないだろうと言う人もいました。しかし、郁子は、テレビで見た子どもたちのまっすぐな瞳が忘れられず、どうしてもその場所に行って、子どもたちのために何かしたかったのです。



そして、とうとう、十一月十三日。タイ西部のタムヒン難民キャンプに来ることができたのです。子どもたちは、郁子を歓迎してくれました。しかし、苦しい状況を強いられた子どもたちの表情はやはりどことなく暗く、不安に満ちていました。

いよいよ演奏です。郁子は、大きく深呼吸をしました。自分の演奏が、子どもたちの心に届くかどうか分からないけれど、心を込めて一生懸命演奏しました。一曲目は、バッハの『ガヴォット』です。郁子の演奏は、木々の間を吹き抜けるさわやかな風のように、一人一人の心の中に、吹き抜けていきました。すると、観客からは、曲の合間に拍手が沸き上がり、子どもたちは目を輝かせながら前へ前へと乗り出してきました。次は、どんな曲を演奏するのかと、じっと舞台を見上げている子、体を曲に合わせて動かしている子。子どもたちの顔に、笑顔がもどってきたのです。その子どもたちのきらきらした瞳を見ているうちに、ヴァイオリンが弾きたくてたまらなかった幼い頃の自分の姿を思い出し、演奏をしているうちに、何とも言えない感情が沸き上がってきたのです。そして、郁子の心も温かさで満たされました。

最後に、ヴァイオリンを弾くことのできるカレン族の男の子といっしょに、日本で覚えてきたカレン族の童謡『ユメポタシ』を演奏しました。

ヴァイオリンの音色は、タムヒン難民キャンプに響きわたりました。人々の悲しみを忘れさせてくれる、そして、祖国ミャンマーを思い出させてくれるようなやさしい音色・・・そっと涙を流す大人たち・・・。

いつの間にか、子どもたちは、郁子と男の子の演奏に合わせて、歌を口ずさんでいました。そして、会場にいる全員に歌が広がっていったのです。

会場にいるカレン族の人々が、郁子のヴァイオリンの音色を聴くことで、心が安らぎ、笑顔になりました。

演奏が終わると割れんばかりの拍手が、郁子をまっていました。

「もう一回、もう一回。」

と、子どもたちは、目を輝かせて、郁子にせがむのでした。

思わずいっしょに演奏した男の子を、郁子は、ぎゅっと抱きしめていました。

今まで味わったことのない気持ちが、心にあふれ出してくることを、郁子は感じました。子どもたちのまっすぐな瞳に、反対に励まされたように感じました。

今までの郁子の演奏は、自分を表現することを最優先させていました。しかし、今の郁子は違います。そう、聴いてくれる人との音の共有体験の大切さを感じながら演奏することができるようになったのです。そして、子どもたちのあふれんばかりの笑顔から、音楽を通して、心を通わせることができると、郁子は、確信するのでした。そのことに気づかせてくれたカレン族の子どもたちの瞳を忘れず、これからも、郁子は、ヴァイオリンに心を込めて演奏を続けることでしょう。

〈※〉

1川井郁子　香川県高松市出身。東京芸術大学卒業・同大学院修了。現在、大阪芸術大学（芸術学部）教授。ヴァイオリニスト、作曲家。
二〇〇七年「川井郁子マザー・ハンド基金」設立、国連ＵＮＨＣＲ協会評議員として、ミャンマー難民キャンプを訪問。二〇〇八年にウガンダの難民キャンプ訪問。

2タイ西部のタムヒン難民キャンプ
一九四八年以来続いているミャンマー政府軍とカレン族など少数民族の間の紛争と、ミャンマー国内で起きている人権侵害により、一九八四年よりミャンマー難民がタイに流入し始めました。タイ国内にはミャンマーとの国境近くに九つの難民キャンプがあります。